



## 特集 日本古写経と版本大藏経

中国・朝鮮半島開版大藏経概観／梶浦 晋  
七寺一切経中の北宋新訳仏典／大塚 紀弘

### 《古写経紹介・その五》

『佛説四諦経』—金剛寺本—／今西 順吉

### 《蔵の中 -TOPICS-》

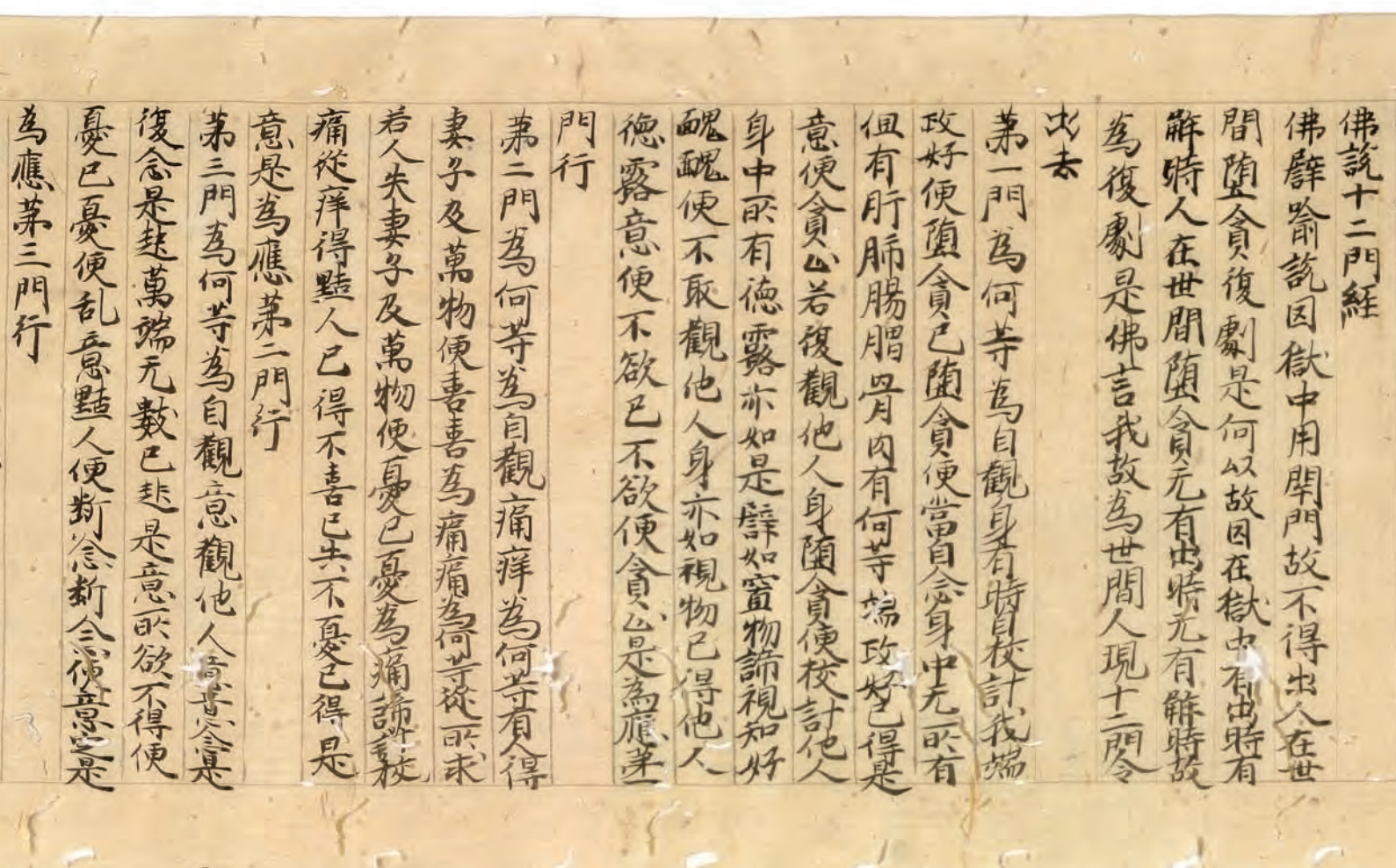
古写経の中の異体字／橋本 貴朗

古写経と災害・対策／吉川 也志保

### 《寺院紹介》

興聖寺／定源(王招国)

大門寺／赤塚 祐道



佛説十二門経

佛辭喻説因獄中用閉門故不得出人在世  
間隨貪復劇是何以故因在獄中有出時有  
解時人在世間隨貪貪元有出時元有解時故  
為復劇是佛言我故為世間人現十二門令  
出去

第一門為何等為自觀身有時計我端  
政好便隨貪已隨貪便當自念身中元所有  
但有肝肺腸胃骨肉有何等端政好已得是  
意便貪心若復觀他人身隨貪便校計他人  
身中所有德露亦如是譬如寶物諦視知好  
醜醜便不取觀他人身亦如視物已得他人  
德露意便不欲已不欲便貪心是為應茅  
門行

第二門為何等為自觀痛痒為何等有得  
妻子及萬物便喜喜為痛痛為何等從所未  
若人失妻子及萬物便憂已憂為痛諦計較  
痛從痒得豎人已得不喜已共不憂已得是  
意是為應茅二門行

第三門為何等為自觀意觀他人意意意是  
復念是起萬端無數已起是意所欲不得便  
憂已憂便乱意豎人便斯念斯念便意意是  
為應茅三門行

# 学術フロンティア満期完了のお礼

今西 順吉

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」は本年度をもって五年の研究期間を無事に満了することになりました。

研究分担者・研究協力者・研究員・研究補助員、その他多数の研究者、事務担当者など、実に多くの方々のご協力のおかげをもって多大な成果を収めることが出来ました。また、多数の方々が生ポジウム・公開研究会にご参加頂くなど、直接的あるいは間接的にご協力・ご支援を下さったことも、大きな支えとなりました。特に諸寺院のご好意がなければ研究そのものが不可能でした。一千年前後にわたって大切に保存されてきた写経の調査研究に絶大なご協力を頂きました。ここに記して心から感謝申し上げます。

五年間の研究活動によって古写経の膨大なデジタル画像を収集することができました。全体から見ればまだ一部分に過ぎないとも言えますが、研究論文や善本叢刊として発表されておりますように、古写経から得られた知見には、予想を遙かに超えた驚嘆すべきものがあります。その一つは、古写経は年代的にも内容的にも、大正新脩大蔵経の底本や校合に用いられた刊本大蔵経よりも古いという点です。これからの仏典研究のためには、古写経の参照が絶対的に不可欠となります。第二に、漢訳仏典

における難解な、あるいは不自然な問題等について、刊本大蔵経よりも古写経の方がインドの原典とよく一致する場合がありますという事実です。

テキストは伝承の間に変化することが避けられません。従来知られているテキストよりも古い、より原型に近い正確なテキストを、古写経の研究によって、実証的に復元する道が開かれることになりました。この作業は今後永らく強力に進められなければなりません。

古写経は単なるテキストではありません。実際にそれを手にして研鑽を重ねた高僧たちや、写経製作の実態、写経の材質など、豊かな歴史を背負った、その意味で、血の通った貴重な遺産であります。この点についても重要な説明がなされました。

古写経研究は、新しい重要な課題に対してわれわれの眼を開かせてくれました。日本の仏教史は決して日本の歴史の中だけにとどまるものではなかった、という事実です。日本人が仏教を学び、仏教を日本人の血肉としたことは周知の通りです。しかし、それだけではなかったのです。印刷以前の時代のことですから、仏典を読むためには写経を借りて読むか、あるいは写経するしか方法がありません。大陸や朝鮮半島で大蔵経が刊行されるよりも遙かに古い時代に日本に伝えられた仏典を、このような方法で

読み継ぐことによって、大陸や朝鮮半島では失われてしまった古い仏典が日本で保たれることになりました。

一世紀ほど前に、敦煌で大量の写経が発見されたとき、世界中に大きな感動を与えましたが、それらの写経は砂漠に埋もれていたものです。千年以上の時間と乾燥のために大部分が零細な断片になっていました。それでも、かけがえない資料ですから、世界中の研究者が注目しました。それに対して、奈良平安古写経は人の手を通して保持されてきました。古い経典から何度も写経を重ねながら、読み継がれて伝承されてきたのです。埋蔵されていたのではなく、生きて伝えられたのです。紙に書かれたものですが、いつ焼失したとしても不思議でなかったはずですが、仏典を大切に思う日本人の心が、今日まで護り続けてきたのです。その古写経が、現存最古の形を伝えてくれる、ということが明らかとなりました。仏教に対する恩返しの意味をも込めて、古写経研究は日本人全体の大きな使命であると言えます。

五年間のプロジェクトは一応ここで完了しますが、まだまだ大きな課題が残されており、来年度以降も引き続き本学として研究活動を継続致します。今後とも皆様方の温かいご支援・ご協力をお願い申し上げます。  
(本学学術フロンティア研究代表者)

## 目次

学術フロンティア満期完了のお礼	今西 順吉 (1)
<b>特集 日本古写経と版本大蔵経</b>	
<small>刊本大蔵経の特徴を探る</small>	
中国・朝鮮半島開版大蔵経概観	梶浦 晋 (3)
<small>日本古写経中に残る北宋期の訳経の歴史</small>	
七寺一切経中の北宋新訳仏典	大塚 紀弘 (5)
<small>《古写経紹介・その五》</small>	
<small>金剛寺に蔵される天下の孤本</small>	
『佛説四諦経』—金剛寺本—	今西 順吉 (7)
<small>《蔵の中 -TOPICS-》</small>	
<small>書写系統の手がかり</small>	
古写経の中の異体字	橋本 貴朗 (9)
<small>先人達の文化財保護の知恵に学ぶ</small>	
古写経と災害・対策	吉川 也志保 (11)
<small>《寺院紹介》</small>	
<small>貴重な一切経をほぼ全巻有する禅刹</small>	
興聖寺	定源(王招国) (13)
<small>歴史の中で一切経はめぐる</small>	
大門寺	赤塚 祐道 (14)
<small>《活動記録》</small>	
<small>学術フロンティアの集大成</small>	
日本古写経データベースの構築	林寺 正俊 (15)
<small>漢語文献の分析から歴史の深層を探る</small>	
国際シンポジウム	(17)
<small>古写経研究の明日をリードする!</small>	
公開研究会	(18)
<small>[出版物紹介]</small>	
<small>儀礼テキスト伝播の多様性を辿る</small>	
『集諸経礼懺儀 卷下』	(18)
既刊書・スタッフ紹介	(19)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味がありまた「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニューズレターのタイトルとしました。



# 日本古写経と版本大蔵経

刊本大蔵経の特徴を探る

## 中国・朝鮮半島開版大蔵経概観

梶浦晋

近年、日本古写経の学術的価値に対する評価が高まっているが、以前は、中国や朝鮮半島の刊本大蔵経が権威あるものとされ、「縮蔵」や「大正蔵」など近代の活字本大蔵経においても、これらが底本や主要な対校本として用いられており、相対的な価値は少しく下がったものの、今も重要な資料であることには変わりがない。ここでは、中国および朝鮮半島開版の大蔵経の版式などについて簡単に紹介したい。

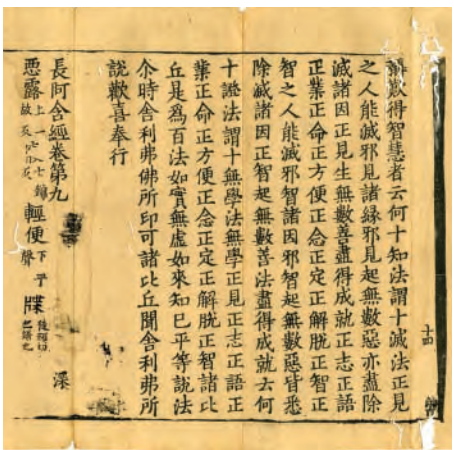
中国・朝鮮半島と日本の刊経では、版式、料紙、字様など外見上異なることが多い。中国・朝鮮半島では単刻・大蔵経をとわず、1版1紙で印刷された後に貼り合わせて製本するものが多いが、日本では、写経の伝統を継承



日本刊経(京都大学人文科学研究所蔵)

色のものが多い。1紙30乃至36行17字、半折6行を標準とし、経題下に千字文函号を、第6行と第7行(或いは第12行と第13行)の間に函号・経名・板数・刻工等がある。

『開元寺版大蔵経』は、『東禪寺版』に次いでおなじ福州の開元寺で開版された大蔵経で、

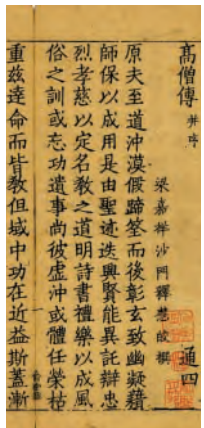


思溪版大蔵経(京都大学人文科学研究所蔵)

『東禪寺版』と同様に巻頭に題記をもつものが多数ある。装幀・版式・料紙などはおおむね『東禪寺版』と同じである。

『思溪版大蔵経』は南宋はじめ頃までに湖州で雕造された大蔵経で、折帖装、1紙30行17字を標準とし、経題の下に千字文函号がある、

函号・経題・板数・刻工等は各紙右端の糊代部分にあるため、通常は確認できない。福州の二蔵では別帖であった音釈を各巻末に付し、以後この形式が刊本大蔵経の通例となった。刊記が少ないこともあり、詳しい開版事情は不明



普寧寺版大蔵経(京都大学人文科学研究所蔵)

し、先に紙を貼り継ぎ印刷するものが多い。このため、紙の継目と板木の変わり目が一致せず、継目部分に印字がかかったり、板木の変わり目で行間が不自然に詰まったり拡がったりすることがある。また中国では元版以降、刻字に便利な直線の多い字体が多用されるが、日本ではながく筆写にちかひ字体が用いられ



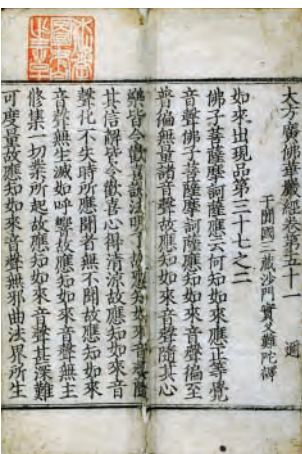
日本刊経紙継目

た。版式においては、中国・朝鮮半島ではその多くに、天地の界線があるが、日本の刊経には、無いものも多い。料紙は、一般に中国では竹紙が多く、朝鮮半島と日本では楮紙が多い。また宋元版大蔵経のうち江南で開板されたものはすべて折帖装で、表紙と包紙を一体化させた包紙表紙のものも多い。

最初の刊本大蔵経は宋の『開宝蔵』であるが、断簡を除けば12巻が確認されているのみである。卷子装で、1紙23行14字を標準とし、天地の界線はない。主題下に大蔵経内の配列順をしめす千字文函号、各紙右端(除第1紙)に経名、巻数、板数、函号などが印刷され、巻末である。

『普寧寺版大蔵経』は、至元年間(1264-1293)に杭州余杭の大普寧寺において白雲宗僧侶が開板したものである。行格等は『思溪版』とは同じであるが、函号・板数・刻工等は福州版のように行間に刻している。また各帖の首尾経題下にある千字文の函号に同函号内の順序をしめす数字が加えられた。巻末に施財者等を記す刊記をもつものがある。

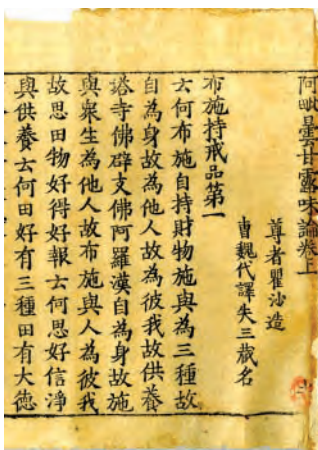
『磧砂版大蔵経』は、南宋中頃に平江の磧砂延聖院で雕造がはじめられ、しばらく活動が停滞したのち、紹定4年(1231)頃から趙安国が都勧縁大檀越となり、本格的に雕造が再開された。延聖院は宝祐6年(1258)火災にあい、刻造事業は中断したが、元代になり復興され補刻追雕が行われた。今日伝わるもの大半は元代のもので、明初に印刷されたものも多い。版式は普寧寺版とほぼ同じで、巻末に刊記を付すものがある。また、元から明初にかけて印刷されたものには扉画を付すものがある。



元官版大蔵経

『影印宋磧砂蔵経』(影印宋版蔵経會、1993)は西安の臥龍寺開元寺兩寺蔵本を底本としているが、不足分を『思溪版』『普寧寺版』『永樂南蔵』等で補っているため、利用には注意を要する。

『元官版大蔵経』は、30年ほど前に日中兩國であいついで発見され注目されたもので、近年



金版大蔵経(京都大学人文科学研究所蔵)

には刊記がある。従来は、宋朝の勅版であるため、本文が唐代以来の正統を継承するものと考えられてきたが、近年の研究によってこの説は否定されている。近く、現存12巻全文の影印が刊行される予定である。

『金版大蔵経』は、『開宝蔵』の覆刻で版式等はおおむねこれに準ずるが、天地の界線を有することが異なる。また、ごく少数の経巻を除き刊記がない。その存在はながく不明であったが、二十世紀になり山西省趙城県の広勝寺からほぼ一蔵が(中国国家図書館現蔵)、チベット

のサキヤ北寺から550巻が発見された。現在では『中華大蔵経(漢文部分)』(中華書局、1984-96)の主たる底本として影印されている。

『契丹蔵』は、遼代に雕造された大蔵経で、『遼蔵』『丹蔵』などと呼ばれ、唐代の中原仏教の伝統を引き継ぐものとして、漢文仏典研究の重要な資料と考えられている。近年、山西省応県の仏宮寺木塔や河北省豊潤県の天宮寺

中国で新たな発見も伝えられている。版式は、1紙42行17字、半折6行で、他の大蔵経とくらべ、1版の行数が多く判型も大きく、天地の界線が双辺(子持界線)である。

明代に刊行された大蔵経は、洪武・永樂ふたつの『南蔵』と『北蔵』(嘉興蔵)等がある。明代以降の大蔵経は、意図的に構成や調巻に改変が加えられており、宋元版と異なることがある。

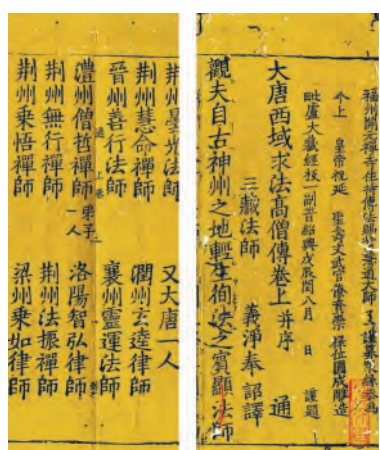
『洪武南蔵』は折帖装で、1紙30行17字、半折6行を標準とする。流布は極めて少ない。四川省図書館所蔵本を底本に『洪武南蔵』(四川省仏教協會、1999)として影印されている。『永樂南蔵』は、『洪武南蔵』の板木を基礎に補刻追雕したものであるとの説と、新たに開雕したとの二説がある。中国では比較的流布しているが、日本での流布は少ない。版式等は『洪武南蔵』とほぼ同じで、各函のはじめに説法図などの扉画を、最後の巻の末尾に韋駄天の画像が付されている。また頒布の料金により、装幀・用紙など九等の品級がもうけられている。

『北蔵』は明朝の嚴重な管理下で印刷下賜されており、『南蔵』に比べて伝存するものは少ない。1紙25行17字、半折5行・天地双辺で、『南蔵』より版型は大きい。『南蔵』と同様に扉画、韋駄天像が付されている。『永樂北蔵』(綾装書局、2000)として影印されている。『南蔵』『北蔵』ともに明朝が刊行したものであるが、収録経典に出入がある。

『嘉興蔵』は、明末から清初にかけて徑山で刊行されたもので、比較的容易に入手でき、今日伝存するものも多い。それまでの大蔵経とは装幀が大きく異なり、每半葉10行20字の袋綴装である。正蔵のあとに統蔵・又統蔵があり、多数の禪語録が収められている。幾度

の塔から遼代の刻本が発見され、このうち数点が『契丹蔵』であるとされる。またトルファンや黒水城で採集された資料群中からも多数の断簡が確認され、徐々にではあるが、その実体が解明されつつある。卷子装で、1紙27行17字を標準とし、第1行と第2行の間もしくは右端に経名、巻数、板数などが印刷されている。応県木塔本は『応県木塔遼代秘蔵』(文物出版社、1991)に全巻が影印されている。天宮寺本は細字の冊子本であるが、詳細は公表されていない。また刊本ではないが、房山石經中の遼金代刻石の底本は『契丹蔵』と密接な関係がある。『房山石經遼金刻経』中国佛教図書館文物館、1986(93)

『東禪寺版大蔵経』は、北宋後期に福州東禪等覺院で開板された大蔵経で、多くの経巻巻首に三行乃至五行程度の雕造の縁由を記した題記を有する。折帖装で、料紙は濃い黄檗



開元寺版題記及柱刻(京都大学人文科学研究所蔵)

か影印本が刊行されているが、統蔵・又統蔵部分を主体とした一部分の出版である。

『乾隆大蔵経』は清朝の勅版で、『龍蔵』とも呼ばれ、板木が現存している。数種の影印本のほか、現存板木から印刷した折帖装本も刊行されている。版式はおおむね『明北蔵』と同じで扇画・韋駄天像を付す。日本での流布は少なく、清代に印刷されたものは、西太后から大谷光瑞に送られた龍谷大学大宮図書館本のみである。従来知られている清代の大蔵経は『乾隆大蔵経』のみであったが、近年あらたに清末から民国初期にかけて常州天寧寺で開板された毘陵蔵とよばれる大蔵経の存在が確認されている。

朝鮮半島では、高麗時代に初雕と再雕二度の開板があり、再雕本は『大正蔵』の底本として用いられている。板木は海印寺に現存し、近代印刷のものもあり、影印本も刊行されている。初雕・再雕ともに卷子装で版式は『開宝蔵』にない、1紙23行14字で、天地に界線がある。(初雕には界線がないものもある)内容においては、高麗の大蔵経は、『開宝蔵』を継承しつつも、諸本を用いて校訂を行い、高麗蔵のみに収められている経典もあり、独自の価値をもつものとして位置づけられている。

以上、中国・朝鮮半島開版の大蔵経について、簡単に紹介したが、刊本大蔵経雕造の経緯や版本の系統などについては、古くは小野玄妙氏や小川貫式氏等の研究があり、近年では、竺沙雅章氏、野沢佳美氏、方廣錫氏、李際寧氏等によって、新たな研究・紹介も多数発表されており、本稿もこれら先学の論考によるものが多

(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究中心(助手))

## 七寺一切経中の北宋新訳仏典

大塚紀弘

## ■入宋僧裔然の仏典請来

永観元年(太平興国八年(九八三)、東大寺僧(真言宗)の裔然は、朝廷から許可を得、門弟四人とともに中国商船に便乗して入宋を果たした。彼らは天台山などを巡礼した後、宋都・開封に入つて北宋皇帝の太宗に謁見し、裔然は太宗から紫衣を賜った。翌年、五台山、龍門を巡礼し、開封に戻ると、裔然は清沼に密教を学び、門弟の盛算は太平興国寺の法天(後述)から悉曇梵書を習い、さらに令遵から密教の伝授を受けたことが知られる。清沼以下の三僧が、いずれも北宋訳経事業の中樞を担っていたことは注目される。

雍熙二年(九八五)の帰国に際して、裔然は太宗から大師号を受け、大蔵経の版本(開宝蔵四八二函五〇四八巻、新訳仏典四一巻、御製廻文偈などを賜った。太平興国八年に刊行されたばかりの開宝蔵や新訳仏典の下賜は、訳経事業を知る裔然の求めによる可能性が高い。帰途の台州では、開封に安置されていたインド伝来の由緒を持つ釈迦瑞像の模刻を行ない、雍熙三年(九八六)に再び中国商船に便乗し

て帰国した。

寛和三年(九八七)、裔然一行は京都に到着し、舍利塔、大蔵経、釈迦如来像などを担ぐ行列は、人々の熱烈な出迎えを受けた。大量の請来文物は蓮台寺に安置されて衆目を集め、後に嵯峨・栖霞寺内の釈迦堂(清涼寺)に移された(釈迦如来像は本尊として現存)。そのうちの大蔵経は、寛仁二年(一〇一八)に裔然の門弟によつて藤原道長に寄進される。

永延二年(九八八)には、門弟の嘉因と祈乾が再び入宋し、太宗に多くの貢物を奉った。彼らは正暦元年(九九〇)に帰国し、翌年に文殊菩薩像を京都にもたらしており(のち平等院の経蔵に安置)、同時に新訳仏典を新たに請来した可能性が高い。延久四年(一〇七二)に入宋した成尋は、法成寺蔵内に裔然請来の大蔵経と新訳仏典二八六巻があると述べており(『参天台五台山記』)、清涼寺にあった新訳仏典は大蔵経とともに道長に寄進され、法成寺の経蔵に安置されたと考えられる。ただし、これらは天喜六年(一〇五八)の火災ですでに失われていた可能性がある。

本には見られない以下の奥書である。

河中府開元寺梵學僧法進筆受那綴朝奉即

行起居舍人權知鄜州軍州軍事借紫臣龜徒證文

大平興国六年四月十五日於鄜州龍興寺譯(こ)から、①太平興国六年(九八一)四月十五日に鄜州の龍興寺で(法天が)梵文から漢訳したこと、②河中府・開元寺の梵学僧である法進が「筆受」「那綴」、中書省の起居舍人と権知鄜州軍州事すなわち鄜州知事を兼ねていた(王)龜徒が「証文」を担当したことが分かる。

北宋訳経事業の原点については、南宋時代の『統資治通鑑長編』『仏祖統紀』などに記述があるが、より古い端拱元年(九八八)の『宋高僧伝』や景祐二年(一〇三三)

## ■七寺本『聖無量寿王経』の来歴

承安五年(一一七五)、尾張国中島郡では在庁官人・大中臣安長の支援により、一切経書写事業が始まり、治承三年(一一七九)頃に完成した。これが現在、名古屋市の七寺に所蔵されている七寺一切経である。この一切経中には、裔然が請来した開宝蔵の系統を引く転写本であることが示す、刊記・印記の写しを持つ仏典が五点見出せ、その他にも開宝蔵系の写本が一定数含まれているとみられる。

七寺本「仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経」(以下「聖無量寿王経」とする)は、開宝蔵の追離分に含まれていたことが確実な法天訳の北宋新訳仏典である。末尾に校正者として見える榮俊は、榮芸とともに一切経の書写事業を取り仕切った僧侶で、多くの仏典の校正を担当している。『聖無量寿王経』は、書写台帳として利用されたと推測される唐代の『貞元新定釈教目録』の入蔵録には当然掲載されていないが、いずれかの場所で書写事業に携わった僧侶の目に触れて、入蔵録所載の仏典とともに書写されたのであろう。なお、本経に見られる朱の天地界線は、七寺一切経の特徴である。

大中祥符八年(一〇一五)の『大中祥符法宝録』には、新訳仏典四一三巻が掲載などが発掘されている。他方、鄜州(のち鄜延路に属す)には「蒲水」という河川が流れており、そのほとりの「蒲津」に龍興寺があつた可能性もあろう。なお、金の王若虚が撰述した「鄜州龍興寺明極軒記」から、この寺に「三門」「巡廊」が備わっていたことが知られる(『瀟南遺老集』)。

次に、②からは、まず法進が河中府・開元寺の梵学僧であつたことが判明し、インド僧の法天と協力して翻訳にあつたことが確認できる。また、「伝法院碑銘」に「鄜時守吏」とある王龜徒については、鄜州知事以外の官位が新たに判明し、『統資治通鑑長編』『仏祖統紀』に見える翻訳に関与したとする記述が裏づけられる。

北宋では、端拱元年の改訂時に七寺本の奥書に見える記述は削除されたと考えられる。開宝蔵の統蔵として刊行される前に、裔然が写本をいち早く日本に請来したからこそ、訳経事業に関する貴重な情報が現在に伝わつたのである。

## 【参考文献】

- ・落合俊典「七寺一切経と古逸経典(同編)七寺古逸経典研究叢書 第一巻 中国撰述経典(其之二)」大東出版社、一九九四年
- ・尾張史料 七寺一切経目録「七寺一切経保存会、一九六八年
- ・上川通夫「裔然入宋の歴史的意義」(『日本中世

されており、「聖無量寿王経」は「最勝仏頂陀羅尼経」「七仏讚頌伽陀」とともに、「鄜州先訳経讀」とある。法天が鄜州で翻訳し、端拱元年(九八八)に訳文が整えられたという。裔然は、雍熙元年(九八四)九月までに訳出・上進された三八巻に、この三巻を加えた計四一巻の新訳仏典を日本にもたらしたと考えてよからう。

開宝蔵は、新訳仏典など数度にわたる統蔵の追離が知られ、『聖無量寿王経』は第一次追離の三〇帙に含まれていたとみられるが、裔然在宋時には、いずれの新訳仏典も未だ刊行されていなかったはずである。七寺本は、以下で述べるように、裔然請来本の系譜を引く写本であるのみならず、刊行以前の本文を保持している可能性も高いのである。

## ■七寺本の奥書から分かる新史実

七寺本「聖無量寿王経」は、内題の大半が欠損しているが、幸い訳者名は確認でき、「西天中印度摩伽陀國那爛陀寺三蔵沙門賜□法天譯」とある。高麗再雕版や福州版、湖州版などの版本では、これより文言が多く、「(前略)那爛寺伝教大師三蔵賜紫沙門臣法天奉 詔譯」とある。この他に、本文に細かい文字の相違点もあるが、注目すべきは尾題の後に付け加えられている版

仏教形成史論(校倉書房、二〇〇七年)

・武内孝善「宋代翻訳経典の特色について」(『密教文化』一一三、一九七六年)

・大蔵会編「大蔵経(百華苑、一九六四年)

・竺沙雅章「開宝蔵」と「契丹蔵」(『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇年)

・塚本善隆「清涼寺釈迦像封蔵の東大寺裔然の手印立誓書」(『宋初の仏教と裔然』(『塚本善隆著作集 第七巻 浄土宗史・美術篇』大東出版社、一九七五年)

・中村菊之進「宋開宝版大蔵経構成考」(『密教文化』二四五、一九八四年)

・中村元他編「アジア仏教史 中国編二 民衆の仏教」(佼成出版社、一九七六年、牧田諦亮執筆)

・西岡虎之助「裔然の入宋について」(『西岡虎之助著作集 第三巻 文化史の研究』三一書房、一九八四年)

・藤善真澄「成尋の齋した彼我の典籍」(『参天台五台山記の研究』関西大学東西学術研究所、二〇〇六年)

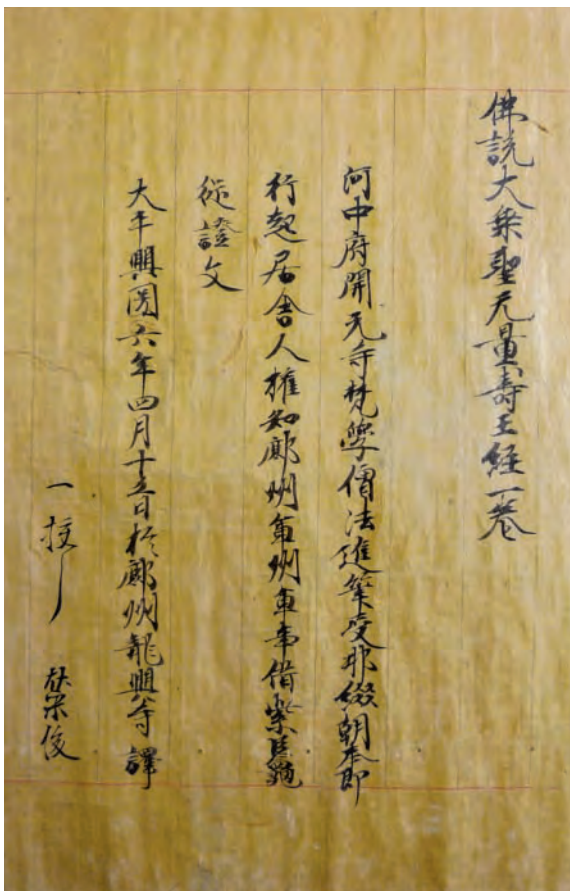
・松本文三郎「趙宋時代の訳経事業」(『仏教史雑考』創元社、一九四四年)

・宮崎市定「宋代官制序説」(『宋代州県制度の由来とその特色』(『宮崎市定全集10 宋』岩波書店、一九九二年)

・廣興「法海漫談 浄土經典概論」(『澳門佛教』二六、二〇〇一年)

・拙稿「一切経書写と仏典目録」(阿部泰郎編「日本における宗教テクストの諸位相と統辞法名」古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八年)

(日本学術振興会特別研究員)



七寺蔵「聖無量寿王経」巻尾  
「大[太]平興国六年四月十五日」の奥書がある。

金剛寺に蔵される天下の孤本

# 『佛説四諦経』——金剛寺本——

今西 順吉

金剛寺所蔵の一切経の中に『佛説四諦経』二巻が存在する。簡潔に四諦について説き、短いながらも首尾一貫した經典である。しかし翻訳者の名を欠いている。経名の下に「中阿含一品」と書き込まれているが、「中阿含」にはこれと同じ經典は存在しない。経録は安世高訳『佛説四諦経』の他に三本あったとするが、

いずれも現存しない。

経は「如是我聞」に始まり、説処を示してから四諦についてその骨格となる項目だけを列挙し、最後に偈を加えて終わる、という形式をとっている。四諦は仏教教理の中心に位置するものであるけれども、通常

は四諦の名目だけを挙げるか、あるいは他の教説と共に説かれるか、さもなければ四諦について詳しく注釈

するかであるから、この写経のように四諦だけを簡潔に説く独立の経が存在しなかつたことが不思議に思われるほどである。その点でこの写経は非常に興味深い。以下に特徴的な点を取り上げることにしたい。

説処は、普通であれば「舍衛國祇樹（又は勝林）給孤獨園」と訳されるが、

の数がいくつあるのか、「四」に限られるのかどうか、などという問題意識が背後にあるのではないかと思わせる。例えば真諦訳の婆藪跋摩 (Vasubandhu) 作『四諦論』(巻一、大正三十二卷三七五上段二四) に「聖諦有四」とあって、そのような議論が詳しく展開されている。同様に「苦是聖諦」などの表現も、苦が果たして聖諦と言えるのかどうかという議論の存在を思わせる。例えば『集異門足論』

卷八(大正第二十六卷四〇一下段五)に「苦集滅道是聖諦耶」とあり、『思益梵天所問經』(巻一、大正第十五卷三八下段二四―二五)に「若苦是聖諦者」と言う。

「苦是聖諦」はそのような議論を前提にして、苦は聖諦であると確認する意味を表している。阿含では「苦諦とはこれこれである」、「あるいは「これこれの苦が苦諦である」と説き進められるのと比較すると、写経の文体は坦々と教義を説く姿勢とは微妙に異なると言わなければならないであろう。

ている。説法をする前に「此經」というのは珍しい。通常は経の最後である。

いよいよ四諦を説くにあたって、まず最初に「聖諦有四」と言う。(経名では最初も最後も四諦であるが、本文では常に聖諦としている。)  
「四聖諦とは」と言つて四聖諦を列挙するのではなく、「聖諦に四あり」という。「聖諦有四」と言う場合には、聖諦

本経では「舍衛國 補足」祇樹林須達多給孤獨伽藍」となっている。通常は祇樹または勝林と訳される Jetavana が祇樹林と訳されている。また給孤獨が長者の本名を加えて須達多給孤獨と訳されているが、須達多も給孤獨も仏典では頻繁に用いられているにもかかわらず、このように一緒に呼ぶ例は見られない。さらに、園が伽藍となっている。伽藍すなわち僧伽藍について、『過去現在因果經』(大正第三卷六五二上段六―一一)は、頻毘娑羅王が竹園僧伽藍を如来に奉施し、如来と諸比丘が住したと言う。僧伽藍が園と同様に用いられている例は少なくない。『賢愚經』には「如是我聞。一時佛在迦維羅衛國尼拘盧陀僧伽藍。」(大正第四・四一五頁中段一〇―一一、四二二下段二三―二四、四三三頁下段二九―四三四頁上段)と言う。これは場所は異なるが写経と同じ形式である。

次に「爾時佛世尊告諸比丘。比丘。唯然。世尊。佛説此經」という文章がある。爾時佛世尊告諸比丘のあとに、通常は仏の言葉があつて説法が始まる。例えば「中阿含」第三十一「分別聖諦經」では「我聞如是。一時佛遊舍衛國。在勝林給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。此是正行説法」(大正第一卷四六七頁中段一―二)と言つて四諦を説き起している。ところが写経では「比丘はへ唯然、世尊よ」(と答えた)となっている。これに近い形式は、例えば安世高訳『四諦経』(巻一)に見られる。「聞如是。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。是時佛告諸比丘。比丘。唯然。比丘。便從佛聞。佛便説是。」(大正第一卷八一―四中段一―一三)。安世高訳では「説是」であるが、写経では「説此經」となつ

四聖諦の個々の説明については今は触れないが、四聖諦を説く經典は単に四聖諦の名目だけを挙げるか、さもなければ詳しい、時にはアビダルマ的な解説を伴うかである。例えば『象跡喻經』(「中阿含經」第三十、大正第一卷三八下段以下)は四聖諦の説明は僅かで、苦聖諦の説明の最後にある「五盛陰」(＝五取蘊)の解説がほぼ全体を占めている。これら諸経と比較すると、この写経のように四聖諦の要目だけを記す極めて要を得た簡潔な經典は他に類を見ない。

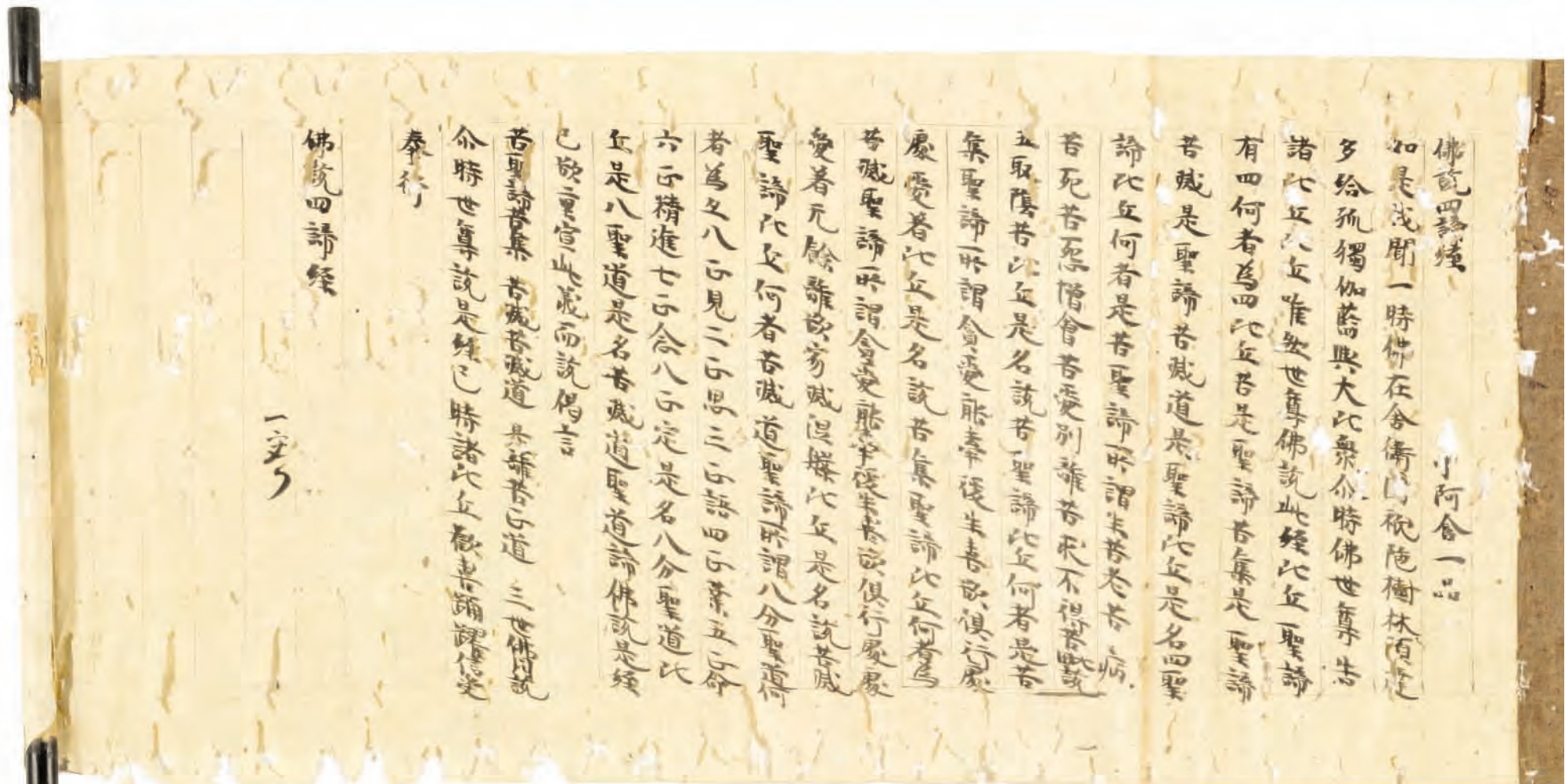
経の最後に、三世諸仏はみな同じく四聖諦を説いたという趣旨の偈が添えられている。この偈と同じものは他に見出せないが、三世諸仏・一切諸仏が特定の法あるいは経を説いた、ということは阿含以来見られるところであつて、ここでは四聖諦を讃えて言う。

この写経と一致する資料が他に見出せないために、判断が難しいけれども、文体に注釈的な印象があることに注目される。また五取陰・八聖道・八分聖道という訳語はいずれも真諦訳の『俱舍釋論』攝大乘論釋『四諦論』に見られる。さらに細かな点についても真諦訳と共通するものが多い。特に真諦が『四諦論』を訳出していることが注目される。

なお詳しい検討を重ねる必要があるが、真諦の業績は必ずしもその全貌が解明されていないので、真諦に焦点を当ててこの写経の究明に努めることに大きな意義があると考えられる。

\*詳しくは拙著『四聖諦とブツダ』(『国際仏教学大学院大学研究紀要』第十号、二〇〇六年三月)を参照。(本学教授・学長)

金剛寺蔵『佛説四諦経』



書写系統の手がかり

## 古写経の中の異体字

橋本貴朗

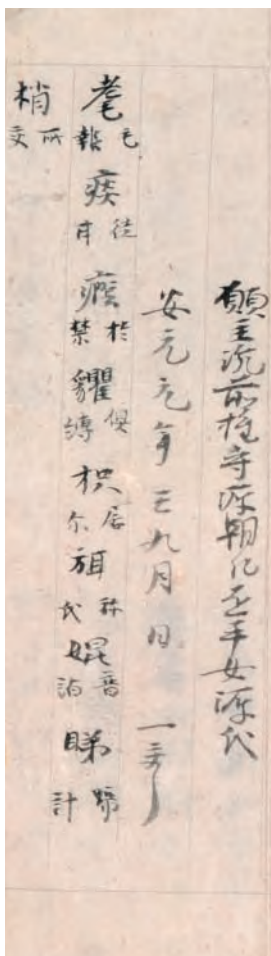
古写経には、今日一般に通用している字体（文字の骨組み）とは異なるもの、すなわち異体字がまみ見られる。

異体字は、言語学・文字学の研究対象とされるだけでなく、古典籍や金石資料の書写年代・制作年代の推定にも用いられてきた。仏典においても、西川寧「法華義疏の書法」<sup>1)</sup>が、聖徳太子筆とされる『法華義疏』の書写年代の推定の手がかりとしている。また、書写系統の推定にも用いられる。伊東卓治「写経より見た過去現在因果経画巻」上・下<sup>2)</sup>は、異体字の検討により、絵因果経（古因果経）の書写系統を、異なる二系統の中国成立の原本に拠るものと推定している。この問題については近年、新資料を加えて、坪井みどり「絵因果経の研究」（山川出版社、二〇〇四年）が再検討を行っている。

近年の古写経研究の成果により、奈良写経が中国・唐代の經典の諸相を忠実に

修若行方能證獲無上菩提咸發深信受  
歡喜

金光明最勝王經卷第九



【図1】徳運寺蔵『金光明最勝王経』卷第九 卷末部分

伝えるものであること、さらに平安・鎌倉写経がその奈良写経の転写本であることが明らかとなってきた。上述の異体字に関する先行研究を踏まえるならば、異体字の検討はこうした書写系統を跡づけるものとなるだろう。

以下、本学学術フロンティアが調査を行った徳運寺一切経の中から、安元元年（一一七五）の奥書を有する『金光明最勝王経』巻第九（図1）を取り上げて、古写経における異体字使用の一端を見てみたい。

徳運寺は、愛知県新城市の臨濟宗方広寺派の寺院で、平安時代末期から江戸時代後期にかけての一群の写経・版経

つぎに、『大正新脩大藏経』の本文では「舌黒鼻梁鼓」（四四八頁二段二六八行）とする一節中の「鼓」字について見てみたい。

「鼓」は「歌」の異体字であるが、徳運寺本の当該箇所では、その「歌」字に用いている（図5）。一方、西大寺本は、「歌」の異体字「𪛗」に作っており（図6）、徳運寺本と異なっている。

ここで注目したいのは、敦煌本では当該箇所に、徳運寺本と同じ「歌」字を用いていることである（図7）。『大正新脩大藏経』では当該箇所に校勘記が付され、元版・明版は「歌」字としており、版本系と古写経系とで使用される字体が判然と分かれるわけではないが、徳運寺本は西大寺本に対してではなく、敦煌本との間に異体字使用の面からは親近性が認められよう。

平安・鎌倉写経においてはしばしば誤写が指摘されるところであるが、この事例のようにかえって敦煌写経の字体を忠実に伝えている場合もある。もとより、奈良時代において『金光明最勝王経』が一本のみ将来されたわけではなく、また、西大寺本

には聖武天皇がその教説に基づいて国分寺建立の詔を下し、各寺の七重塔には金字の書写になる『金光明最勝王経』が納められることとなった（『続日本紀』・『類聚三代格』）。

まず注目したいのは、『大正新脩大藏経』第十六巻の本文では「金銀琉璃車渠馬瑙珊瑚琥珀璧玉珂貝」（四四七頁二段五〜六行）とする一節中の「璫」字である。この「璫」字については、『大正新脩大藏経』に校勘記は見られないが、徳運寺本は異体字を用いている（図2）。「璫」の異体字「𪛗」の「凶」部分を、「山」に作ったものである。

ここで、奈良写経である奈良・西大寺所蔵の『金光明最勝王経』（国宝。以下、西大寺本と称す）を見てみよう。西大寺本は、天平宝字六年（七六二）に百濟豊虫が両親の追善のために発願したもので、全十巻が完存している。全面に白点・朱点・書き入れが加えられており、国語学においても貴重な資料となっている。<sup>5)</sup>その西大寺本の当該箇所であるが、徳運寺本と同じく、「𪛗」字の「凶」部分を「山」に作った異体字を用いている（図3）。

さらに、敦煌写経と比較してみよう。敦煌写経中の『金光明最勝王経』は、断片も含めて数多く残るが、ここでは保存状況

が徳運寺本の祖本ではないと思われるが、平安・鎌倉写経の重要性を示す好例といえよう。

海外においては、仏典研究における異体字への関心が高く、敦煌写経についてはいくつかの異体字字典が刊行されており、近年においても、黄征『敦煌俗字典』（上海教育出版社、二〇〇五年）の刊行を見た。また、李圭甲編『高麗大藏経異体字字典』（高麗大藏経研究所、二〇〇〇年）も出されている。国内においても、数種の異体字字典が刊行されているが、必ずしも典拠が明確ではなく、実例による異体字字典の作成が待たれる。

奈良写経については、宮内庁正倉院事務所所蔵の聖語藏経巻のデジタル画像が順次刊行されており、それとともに、本学学術フロンティアが集積してきた平安・鎌倉写経のデジタル画像は、このような面においても格好の資料を提供するものとなるだろう。

## 【註】

- 1) 『西川寧著作集』第一卷（云社、一九九一年、初出一九七一年）。
- 2) 『美術研究』第二四九・二五〇号（一九四八年）。
- 3) 大塚紀弘「一切経書写と仏典目録」（阿部



【図5】

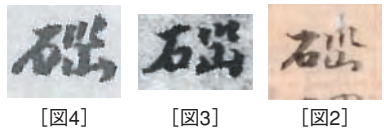


【図6】



【図7】

の異体字の使用は、この想定を跡づけるものといえよう。



【図2】

【図3】

【図4】

が比較的良好なロシアのオランダブルク・コレクションの零巻（『俄藏敦煌文献』三（上海古籍出版社、一九九三年）所収、中一三四。以下、敦煌本と称す）を用いることにしたい。この敦煌本は、孟列夫（メンシコフ）主編『俄藏敦煌漢文写卷叙録』上冊（上海古籍出版社、一九九九年）によれば、書写年代を九〜十一世紀とするが、書風や書写形式から見て、唐代のものと考えられる。<sup>6)</sup>

さて、敦煌本の当該箇所であるが、徳運寺本・西大寺本と同じく、「𪛗」字の「凶」部分を「山」に作った異体字を用いている（図4）。

徳運寺本の本文は、サンプリング調査では、西大寺本との近似性を示しており、その本文は奈良写経の系譜にあるものと推定される。そして、敦煌本の本文は、西大寺本・徳運寺本の双方と、とりわけ西大寺本と近似性を示している。まさに、唐代写経から奈良写経へ、奈良写経から平安・鎌倉写経へと書写の系譜が想定されることである。同一の異体字の使用は、この想定を跡づけるものといえよう。

泰郎編『日本における宗教テキストの諸相と統辞法』名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八年）参照。なお本巻は改装されて、折本二冊となっている。徳運寺所蔵の古写経については、本年度、本学学術フロンティアより報告書を刊行予定。

- 4) 勝浦令子「『金光明最勝王経』の舶載時期」（『続日本紀研究会編』『続日本紀の諸相』塙書房、二〇〇四年）参照。
- 5) 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（『春日政治著作集』別巻、勉誠社、一九八五年、初出一九四二年）参照。
- 6) 本学・落合俊典教授の御教示による。
- 7) このほか「西」として「𪛗」字を挙げているが、巻末の略符一覧には「西」は見えず、また『大正新脩大藏経勘同目録』（『昭和法宝総目録』第一巻）の『金光明最勝王経』の校本項には西福寺本・西大寺本が挙げられており、何本を指すものか不明。なお、校勘記では本文「𪛗」字を「𪛗」とするが、高麗再雕本には「𪛗」とあり、「𪛗」は誤植と思われる。
- 8) 丸善よりCD-R版にて、第一期隋・唐経篇（二〇〇〇年）、第二期天平十二年御願経（二〇〇一〜二〇〇三年）、第三期神護景雲二年御願経（二〇〇七年）が刊行されている。

## 【図版典拠】

図3・図6 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（『春日政治著作集』別巻、勉誠社、一九八五年）  
図4・図7 『俄藏敦煌文献』三（上海古籍出版社、一九九三年）

（研究員（PD）

# 古写経と災害・対策

吉川也志保

史料に対して最も悲惨な被害を及ぼす可能性の一つに「災害」がある。自然災害には水害・地震・火山の噴火・山火事等、人的災害には、戦災・テロリズム・火災・爆発・水害(パイプ破損、漏水、排水不良等)・化学薬品の流出・漏電等が考えられる(『災害と資料保存』「国際図書館連盟保存分科会(IFLA-PAC)監修 図書館の災害対策」参照82～83頁)。地震は時として、火災や、津波という大規模な水害の起因にもなりうる。また、火災の消火活動によって、水害と同等の被害を蒙る史料もある。このように災害の起因は様々であるが、諸々の被害を大まかに整理すると、火災と水害に類するものが大半を占めることがわかる。

今日、我々が目にすることができる史料は、これらの災害を避け、あるいは乗り越えて伝来してきたとも言えるだろう。災害対策の実践には大別して、災害が起こる前に行う「防備」と、万が一起きてしまった場合の「復旧」がある。かつて真福寺は、現岐阜県羽島市にあ



【写真1】 真福寺(大須観音)

たる木曾川と長良川によって画される尾張国の西境の間をなす中島郡大須庄を拠点として形成されていたが、慶長の大火水は聖教を多く水損し、寺自体にも大きな被害を与えたという。一部の史料には、当時のものと見られる被害の痕跡や修復がみられる。水分を吸収した材質は変形する可能性があり、通常の保管環境であれば紙には発生しにくい細菌類も豊富な水分によって生育しやすくなり、紙を変色させる可能性もある。このため、水に濡れた資料は、速やかに乾燥させなければならぬ。48時間以内に乾燥が間に合わないものは、雑菌の繁殖を抑えるため、冷凍処置を施す点ことが推奨さ

関連して、内裏の「御池」に入れた「官本・官物」があることが知られる。それらは、焼失を免れるため、禁裏文庫から内裏の池に投げ込まれたらしく、翌日、それらを捜索し、水に濡れた書籍を近習に命じて、「御庭」で干させていることも分かるそうだ。現代人の視点から見れば、やや荒っぽい措置に思えるが、焼失を免れたという点においては評価すべきだろう。それでは、現在ほどのような災害対策が推奨されているのだろうか。

1998年に邦訳が刊行されたサリー・ブキャナン著『図書館、文書館における災害対策』は、(Ⅰ)防備、(Ⅱ)災害復旧の2部構成であり、対策に関する提言を①企画、②予防、③保護、④対処、⑤復旧の5段階に分けている。同著は、組織としての図書館・文書館に向けて執筆されたため、非常時に災害から救済するにあたっての蔵書の優先順位に関する査定や、職員の訓練実施、企画報告書の作成に関する項目が含まれる。古写経の保存には必ずしも対応しない項目も含まれるが、史料を保管する様々な施設で、実践・応用できるような内容を中心として以下に取り上げた。

①企画…非常時の適切な災害対策を結実

させるために必要とされる。責任の割り当て、責任範囲の設定、伝達経路の設定、史料の査定、潜在的危険箇所の確認、災害防備・復旧計画の成文化などが挙げられる。

②予防・建物の内部と外部の危険箇所を点検することにより、災害予防に効果的な施設の建築や改修方法を検討する。

A. 外部環境の危険箇所調査…(1)地形や気候に関連する潜在的危険性、(2)建物に影響する水の危険性、(3)排水設備、(4)屋根・扉・窓・土台・建築素材の状態、(5)周辺に枯葉・紙屑など燃えやすいものがないかを調査する。

B. 内部環境の危険箇所調査…(1)天井・窓の検査、(2)水漏れ検査、(3)配管、暖房・換気システム、電気配線、火災探知機、自動消火設備、水漏れ警報機等がある場合は、それらを定期的に検査する。

④対処…万が一災害が起こった場合、

れている。また、水分を吸収した紙は通常よりも約60～80%重量が増加すると言われ、持ち運ぶ際には、腰を痛めるなどの怪我に注意が必要となる。

慶長の大火水を契機として家康が名古屋城を築いた際に真福寺は、現在の愛知県名古屋市に移転した(写真1)。このような移転の措置は、後述する「予防」対策の中で触れられる「地形や気候に関連する潜在的危険性」に配慮した「防護」方法に相当するだろう。

また、七寺一切経は、疎開という手段を用いた適切な「防備」によって、名古屋空襲という戦災を避け、現代まで守り抜かれてきた。昭和18年、文部省は国宝、重要美術品等の爆撃による焼失を避けるため、「国宝、重要美術品ノ防空施設整備要項」を作成した。愛知県の戦時下における文化財保護については、2009年夏、名古屋博物館で「小栗鉄次郎―戦火から国宝を守った男―」展を企画した梶山勝氏による資料紹介(戦時下の文化財保護―愛知県史蹟名勝天然記念物主事、小栗鉄次郎の日記を中心として)『名古屋博物館 研究紀要第32巻』名古屋博物館、2008年)で小栗鉄次郎らの活動が明らかになっている。それによると、七寺一切経は昭和19年4月18

効率的かつ迅速に対処できるよう準備しておくべき適切な計画を検討する。応急対応表や、復旧支援依頼の連絡先リストを作成する。復旧手段のいくつかの選択肢と、対処復旧計画における優先順位も考察する。

⑤復旧…火災や、水害関連の非常事態における復旧活動に向け、これまで様々な修復の技術と方法が試行され評価されてきている。サリー・ブキャナン著前出書の第5章(第7章とともに)、災害発生時から48時間以内に実施すべき対策が掲載されている『文化財防災ウィール』(写真2)もあわせて参照されたい。人命救助を優先する点、できるだけ早く保存修復の専門家に連絡する点、最優先の史料から復旧を始める点、48時間以内に乾燥が間に合わな



【写真2】 文化財防災ウィール

19日に、熱田神宮の国宝・重要文化財、総見寺の銅鐸、東照宮の太刀2口とともに、愛知県越戸の灰宝神社へ疎開させられたとされる。同月20日に文部省大口氏立会いの下、七寺一切経唐櫃に番号札が貼り付けられた。小栗の日記によると、疎開させた国宝類の状態調査を定期的に行い、同年11月15日には、灰宝神社まで赴いて、七寺一切経の曝涼を手伝ったという記述もある。その後、昭和20年3月、七寺は全焼したが、辛くも一切経は空襲を免れ、今日に至る。

火災は、記録の判読を困難あるいは不可能にさせるだけでなく史料の支持体自体を焼失させるという点で、最も重篤な被害とも言える。焼けた史料の判読には、赤外線を用いる場合があり、状態によっては判読に成功することもある。しかし、燃えた事で触れると崩れるほどに脆くなっている場合、判読は困難であり、形態を留めていない場合は、テキストの復元は不可能だと考えられる。

火による被害を防ぐために先人たちが書物を池や井戸に入れたという興味深い事例もある。田島公氏の論文によると、勸修寺経慶の日記「勸慶日記」万治四年正月十六条に、前日(十五条)の「二条家出火、内裏・院中・諸臣炎上」の記事に

いものは冷凍処置を施す点など、基本的な救出の方法が掲載されている。

本稿は、資料保存関連刊行物ならびに各分野の論文等に依拠しながら執筆したのだが、この機会をもって、貴重な史料の災害対策に関する知識が更に浸透する一助となれば幸いである。

### 【参考文献】

- 日本図書館協会資料保存委員会編『災害と資料保存』日本図書館協会、1997年
- 安江明夫監修『図書館、文書館における災害対策』、日本図書館協会、1998年
- 阿部泰郎「真福寺大須文庫―中世寺院の知的体系研究の拠点―」『文学』2巻3号、2001年、51～54頁
- 梶山勝「資料紹介 戦時下の文化財保護―愛知県史蹟名勝天然記念物主事、小栗鉄次郎の日記を中心として―」『名古屋博物館 研究紀要第32巻』名古屋博物館、2008年
- 田島公「近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録 ―東山御文庫本の史科学的・目録学的研究のために―」『禁裏・公家文庫研究 第一輯』思文閣出版、2003年

### 【謝辞】

この度、貴重な調査に参加させていただいた阿部泰郎先生、落合俊典先生、ならびに関係者の皆様、御助言をいただきました中村一紀先生に深謝いたします。

(日本学術振興会特別研究員)

## 寺院紹介

# 興聖寺

貴重な一切経をほぼ全巻有する禅刹

京都市上京区の堀川通沿いに興聖寺こうせいじはあります。文禄年間(1592～96)に虚応こおうえん円耳(1559～1619)禅師が大昭庵を結んでいましたが、慶長8年(1603)頃、古田織部おぐべ(1544(1543とも)～1615)がその場所に寺院を建立し、号を円通山、寺名を興聖寺と改め草創したのが、興聖寺の始まりと言われています。寛永6年(1629)、虚応禅師の奏上で後水尾天皇の勅願所となりました。天明の大火(1788年)で類焼した後、寺運衰退し、明治20年(1887)に臨済宗相国寺派に合流しましたが、現在は臨済宗興聖寺派の本山となっています。

今日の堂宇は天明以降の再建で、境内には本堂をはじめ、庫裏・経蔵などがあります。本尊は釈迦如来像で、その両脇には愛宕山の旧本地仏であった勝軍地藏菩薩像と、藤堂高虎(1556～1630)の寄贈による達磨像が安置されています。本寺所蔵の紙本墨画の寒山拾得図は、

京画壇の代表者であった曾我蕭白(1730～81)の作で、重要文化財に指定されています。このように多数の文化財を秘蔵し、更に国史学・国語学及び仏教学の研究において極めて貴重な資料として注目されている一切経が蔵されているのです。

## 興聖寺一切経

一切経は、現在、二階建ての土蔵の二階部分に、木棚を設けて格納されています。経箱492箱は江戸時代に寄進されたもので、一箱あたり10帖前後、合わせて六千余巻現存します。ほぼ全体的にその保存状況は良好です。

興聖寺一切経は、平安末期に丹波国桑田郡小川郷(京都府亀岡市)にあった西楽寺で書写され、その後、南山城の海住山寺かいじゆうざんじ(京都府木津川市)に移り、慶長3年(1598)にその海住山寺から伝わってきたものを中心となっています。笠置山より承元2年(1208)に解脱房貞慶(1155～1213)が海住山寺に移住していますが、興聖寺一切経も、貞慶やその弟子の慈心房覚真(?)(1243)と深く関わっていたと考えられています。

一切経が興聖寺に移つてからは、開山の虚応禅師によつて大切に保存され、寺外への持出を厳禁し、数回にわたつて補写・

## 寺院紹介

# 大門寺

歴史の中で一切経はめぐる

大阪府茨木市、北摂の山あいにある神峯山大門寺かぶさんだいまんじは今をさかのぼること千二百有余年の宝亀2年(771)、桓武天皇の兄にあたる開成皇子(724～781)を開基とする古刹です。開成皇子との関係を伝える寺院は箕面の勝尾寺、高槻の神峯山寺など北摂地域に点在しており大門寺もその一つとなります。

このように創建は古く、弘法大師空海がこの地に来て金剛、蔵王の二像を刻み守護神としたとも伝えるほどですので、平安時代に起源を遡ることができるといえる。平安時代に起源を遡ることができる古代密教寺院といえましょう。現在は京都仁和寺を総本山とする真言宗御室派に属しております。

大門寺の創建から時代を経た平安末期、一大事業が行われました。一切経の書写であります。ご承知のとおり一切経の書写事業は莫大な費用と労力を必要とします。多くの時間をかけ、そして大勢の人々がこの事業に携わりました。大門寺一切経には、当時、この事業に参加



大門寺本堂

した老若男女の名前、周辺寺院の名前を見ることができ、とくに「観音大門寺」と記されていることから、本尊如意輪観音を中心とした信仰をもとに人々が集まっていた様子がわかります。大門寺には平安末および鎌倉中期に書写された写経がそれぞれ残されています。すなわち大門寺の一切経書写事業は二期に分けて行われたようであり、

その後、時代が移りゆく中で地震や兵燹により多くの堂宇が失われました。現在の山容は江戸時代に入った寛永19年(1642)に快我上人により復興され



興聖寺山門

修理などの事業を行ってきました。

『大唐西域記』の写本が、平安期の訓点が付されているとして取り上げられ、初めて学界にその存在が知られました。『大唐西域記』には延暦4年(785)の奥書があり、興聖寺一切経の中で最も早い時期に書写された文献です。本書は京都国立博物館に蔵されている康和4年(1102)の同書写本より、三百年以上古く、既知現存する最古の写本と認められています。

これまでの一切経全体に関する史的な研究については、1994年から97年にかけて前後4年にわたる長期の調査が実施されており、その成果として1999年に『興聖寺一切経調査報告書』が刊行されました。仏教学的な視点からの研究については、藤善真澄氏が

たものです。現在の建物のほとんどは、この当時の再建によるものであります。

しかし伽藍の復興は莫大な費用がかかります。伽藍復興の一大事業のためにやむなく平安・鎌倉期の一切経を手放すこととなりました。

その一切経は現在、奈良県大和郡山市の西方寺に伝わっております。以前『いとくら』2号、西方寺一切経について紹介しましたが、西方寺には大門寺に所蔵されていた一切経のうち2532巻が今なお残されております。一切経の多くが西方寺に残ったことにより大門寺一切経が改めて注目されることとなりました。

現在、大門寺に残る一切経は檀原考古学研究所初代所長で関西大学名誉教授であった末永雅雄博士により昭和62年(1987)寄進されたものであり、大門寺史を語る貴重な史料となっております。大門寺の歴史を支えてきた一切経。散逸した経典が再び大門寺に戻つてく



大門寺山門

『続高僧伝』玄奘伝の成立―新発見の興聖本をめぐって―(『鷹陵史学』第5号、1979年)において、興聖寺本に現行本の玄奘伝の底本的な位置づけを与えています。これによつて、興聖寺一切経の資料的価値の一端を窺知することができます。

興聖寺一切経の中には北宋勅版からの伝写本も存しますが、そのほとんどは奈良平安朝の伝写本であり、いわば唐代の長安仏教のテキストを反映していると位置付けられています。具体例を挙げると、『長爪梵志請問経』の現行の刊本がその訳者を「大唐三蔵法師義浄」とするに對し、興聖寺本は「大周三蔵法師義浄」としています。その点から、興聖寺本は則天武后時期のテキストの原型をとどめていると推測できます。

本学学術フロントティアでは、興聖寺長門玄晃住職の深いご理解・協力のもと、調査作成・写真撮影などの調査を行ってきました。今後更に本格的な研究が期待されます。

## 【参考文献】

『興聖寺一切経調査報告書』(京都府古文書調査報告書第十三集、1999年)  
(定源(王招国))

るといふのも不思議なことです。これらは茨木市により調査が行われ、『新修茨木市史』に一切経の奥書が収録されております。  
樹々に囲まれた大門寺には春はさわやかな新緑の風が吹き、秋には境内の木々が赤や黄色に色づき、訪れる参拝客の目を楽しませております。  
(赤塚祐道)



# 活動記録

学術フロンティアの集大成

## 日本古写経データベースの構築

林寺正俊

本学の学術フロンティア・プロジェクトは、9世紀初頭に空海のもたらした『貞元入藏録』(西紀800年撰)に拠って、刊本一切経が刊行されるよりも前の唐代一切経(五千数百巻から成る)をまさに日本の古写経を用いて復元しようとの目標

のもと、平成17年度から五カ年の計画で始まった。そして、ついに今年で最終年度を迎えることになった。

これまでの約4年半の間に、金剛寺(大阪府河内長野市)と七寺(名古屋市中区)をはじめとして、興聖寺(京都市)、西方寺(奈良県大和郡山田市)、大門寺(大阪府茨木市)、徳運寺(愛知県新城市)などの各寺院の有する古写経の調査研究を行い、あわせてそれらのデジタル画像の集積にも努めてきた。相当量のまとまった一切経が残されている寺院のうち、当プロジェクトの期間中にその調査とデジタル撮影をすべて完了することができたのは金剛寺一切経である。金剛寺一切経は平安末期から鎌倉後期にかけて断続的に書写された写経群で、約4500巻が現存している。

### 調査撮影の現場

では、当プロジェクトが主力を注いで調査撮影を行った金剛寺一切経を例にとり、実際にどのように作業が進められてきたのかということについて若干解説しよう。現場の作業手順としては、調査あるいは撮影すべき經典の収められた保存箱(中性紙製)をまず宝物館(写真1)から運び出し(写真2)、その上で調査部屋と撮影部屋に分かれてそれぞれの作業



【写真1】 金剛寺宝物館



【写真4】 3人が基本の撮影チーム

については残念ながらまだ完了の目処はたっていない。名古屋の七寺には平安末期書写の一切経が約4954巻現存しているが、これまでに撮影を終えることができたのはそのうちの約1200巻分である。七寺に関してもこれまでに計40日の調査が行われ、のべ365人が参加してきたが、完了までの道のりはまだ遠いと言わざるを得ない。このほか、西方寺・大門寺・興聖寺・徳運寺などの一切経についても調査と撮影を行ったが、調査日数が限られているなどの諸事情により、集積できたデジタル画像はそれぞれの寺院につき約100、250巻程度にとどまっている。

### デジタル画像の公開

各寺院の一切経のデジタル画像は、

とりわけ全撮影の完了した金剛寺一切経を中心として、本年度(2009年度)中に(株)堀内カラーのシステムによりデータベース化される。このシステムは、經典名、經典番号、所蔵寺院などの項目によって目的の經典を検索し、本学に当該經典のデジタル画像が集積されている場合には、その画像を表示するシステムである。經典名は新旧どちらの漢字を用いても検索可能であり、また平仮名で經典の読みを入力してもヒットするようになっている。經典番号による検索では、一般に用いられる『大正新脩大藏經』の番号でも『貞元入藏録』の番号(『日本現存八種一切経対照目録』所掲の番号)でも可能である(写真5)。

このデジタル画像は、古写経を蔵する各寺院の所有権の問題やデジタル画像データのセキュリティ上の都合があるため、インターネットを通してすべてを公開するわけにはいかないが、経巻冒頭のJPEG画像(本文を含む一カット分)については本学のウェブサイトト上ですべて公開することになる。これによって、本学に如何なる古写経の画像が



【写真2】 經典保蔵箱の運搬作業

が行われる(写真3)。カメラはNikon D2Xを使用し、撮影は基本的に3人のチームで行う。中央には古写経の上にガラス板を置いてシャッターを切る撮影担当者、その左には経巻の未撮影部分を送り出す人、右には撮影し終わった部分を巻き取る人というように、役割を分担することによって撮影の効率を上げるとともに、デリケートな紙で出来ている貴重な古写経をより丁寧に扱うべく細心の注意が払われているのである(写真4)。このようにして撮影が進められ、本年(2009年)7月に撮影が完了したのである。4年半の間に行われた金剛寺調査の日数と参加人数(学部生・大学院生・研究員・教員など)を年度毎に示すならば次の通りである。

集積されているか、また経巻の冒頭の状態や經典の内題はどうなっているかなどの情報はインターネットを通じて誰でも知ることができるようになる。冒頭から末尾までの経巻全体のデジタル画像(PDF化された画像ファイル)については本学内においてのみ公開するが、画像の閲覧を希望し本学に來学する方には閲覧が認められる予定である(本学が文京区の新校舎に移転する2010年4月以降)。

### 漢文大藏經ルネッサンス

複数の古写経のデジタル画像を一カ所で閲覧することができるデータベースが構築されるならば、それによって各寺院に直接赴いて実地調査する研究者



【写真5】 日本古写経データベース検索画面

平成17年度 全27日 のべ300人  
平成18年度 全30日 のべ416人  
平成19年度 全22日 のべ226人  
平成20年度 全22日 のべ234人  
平成21年度 全14日 のべ145人  
(最終年度は10月末までの集計)  
合計すると、この4年半の間に115日の調査が行われ、のべ1321人が参加したことになるのである。完了までにどれほど多くの時間と人員を要したかが以上によって知られるであろう。

### デジタル画像の集積状況

金剛寺一切経についてはすべてのデジタル撮影が終了したが、他寺院の一切経に



【写真3】 古写経の調査風景

個々人の労力と経済的負担が大幅に減るばかりではなく、文献学的方法に基づいて行われる經典の厳密なテキスト研究そのものも飛躍的に効率化されることになる。文部科学省の助成を受けた学術フロンティア・プロジェクトはこの4年半の間に金剛寺一切経をはじめとする各寺院一切経のデジタル画像を集積し続け、今年度をもってついに終了することになるが、ここで古写経のデジタル画像の集積を打ち切るのではなく、データベースをさらに拡充するためにも今後画像の集積を続ける方向で検討が進められている。

複数の古写経を資料としながら厳密なテキスト・クリティークを行い、刊本一切経以前の唐代一切経の全体像を復元する、というこの試みは、まさに21世紀の「漢文大藏經ルネッサンス」と言っても過言ではなからう。向こう5年先、10年先に果たしてどれだけのデジタル画像が集積されるであろうか。そして、それらを用いて一体どのような新しい知見がもたらされるであろうか。古写経の調査や撮影にはさまざまな「現場の苦勞」も伴うけれども、こうして学問の将来的な展開を想うと楽しくもなるのである。

(研究員(PD))

## 国際シンポジウム

漢語文献の分析から歴史の深層を探る  
平成20年度は公開シンポジウムを開催した。  
講演者及び講演題目については次の通りである。

テーマ「漢訳仏典研究の新時代」  
平成20年12月6日(土)

午前10時30分～午後5時30分

於泉ガーデン・コンフェレンスセンター

三宅徹誠(国際仏教学大学院大学附置国際  
仏教学研究所非常勤研究員)

「金剛寺蔵保延四年写本より見た日本に  
おける『無量寿経優婆提舍願生偈註』の  
伝承」

池 麗梅(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学  
大学院アジア研究科博士課程)

「国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻  
第一の系譜について」

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部企画室長・  
京都大学大学院客員教授)

「国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻  
第一の書誌学的研究」

シルヴィオ・ヴィータ(イタリア国立東方学研  
究所所長)

「The Buddhist Canon as a Material Object  
in Medieval China: Perspectives of  
Research」

陳 金華(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学  
教授)

「The Fate of a Chinese Text in Japan :  
Yakushin's 葉雋(?-1110+) Criticisms of  
Huiyuan's 海雲(?-834+) Account of  
Esoteric Lineages in Tang China」

## 公開研究会

古写経研究の明日をリードする！

昨年度第3回、及び今年度第1回・第2回  
公開研究会について報告する。全て本学にお  
いて開催された。日時・発表者・発表題目、  
及び詳細については次の通りである。

○平成20年度第3回公開研究会

平成20年11月15日(土)午後3～5時

赤塚祐道(国際仏教学大学院大学学術フロン  
ティア研究補助員)

「日本古写経本系の『陀羅尼雑集』に見られ  
る特色」

大塚紀弘(日本学術振興会特別研究員)

「金剛寺一切経の来歴について」

佐藤愛弓(大谷大学助教)

「袈裟と女人―『袈裟表相』をめぐる諸問  
題―」

赤塚氏は、『陀羅尼雑集』の骨格となってい  
る『七仏八菩薩神呪陀羅尼経』との関係に分  
析しつつ、日本古写経本系と版本系の成立に  
ついて検討された。大塚氏は、金剛寺一切経  
中の「天野宮一切経」とある奥書などに着目  
しながら、金剛寺一切経の成立を論じられた。



南宏信研究員

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

「高宗期における『西域記』テキストの変改  
について―日本古抄本による検証―」

今回は、講演者を6人招き、午前中から  
夕方まで長時間にわたって開催した。最初  
に今西順吉国際仏教学院理事長から代表挨拶  
があり、その後、各講演者による講演が  
なされた。

三宅氏は、金剛寺蔵『無量寿経優婆提舍願  
生偈註』巻下に付された訓点を詳しく分析  
された。ヨコト点・返り点・仮名などを総合  
的に見ると、当時比叡山で用いられていた訓  
点であると論じられた。また、本書が金剛  
寺へ至った経緯について、当時の南都・南山  
城の動向などを踏まえ検討された。

池氏は、天台大師智顛(538～632)  
の講説した内容を、弟子の章安灌頂(561  
～632)が聴記・整理した『摩訶止観』の  
諸本の系譜について論じられた。金剛寺本や  
国際仏教学大学院大学蔵巻第一などの古写  
本を中心に用いて、『摩訶止観』の本来の形を  
検討された。



興聖寺蔵『大唐西域記』のパネルを展示した。  
右は定源研究補助員。

佐藤氏は、名古屋真福寺所蔵の聖教『袈裟  
表相』に関して、その他の袈裟の功德を説い  
た文献との関係について検討された。

○平成21年度第1回公開研究会

平成21年5月23日(土)午後3～5時

南 宏信(国際仏教学大学院大学学術フロン  
ティア研究員)

「玄一撰『無量寿経記』の諸本について」  
坂本昭二(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ  
研究センター研究員)

「金剛寺所蔵古写経『大宝積経』の料紙分析」

齊藤隆信(佛教大学准教授)

「漢訳仏典における韻文の種々相」  
南氏は、新羅浄土教の僧玄一(7世紀頃)  
撰『無量寿経記』について、宮内庁書陵部蔵奈  
良朝写本を用いて再検討された。坂本氏は、  
金剛寺蔵『大宝積経』の料紙を分析、その原  
材料や紙の漉き方などを明らかにされた。

齊藤氏は、長年漢訳仏典の韻文を研究され  
ているが、今回は『般泥洹経』『大智度論』を  
とりあげ、押韻部分を分析し各経典が包含  
する問題点を検討された。

○平成21年度第2回公開研究会

平成21年10月10日(土)午後3～5時

恋田知子(国際仏教学大学院大学学術フロン  
ティア研究員)

「新出金剛寺蔵『十種供養式』をめくって  
―法華経の唱導と儀礼―」

齊藤達也(国際仏教学大学院大学附属図書  
館職員)

「金剛寺本『続高僧伝』の考察―未収伝記  
の問題と巻四玄奘伝を中心に―」

中村一紀(宮内庁書陵部図書課員)

「モノを伝えるということ」

赤尾氏は、池氏と同じく国際仏教学大学  
院大学蔵『摩訶止観』巻第一を題材に、書誌  
的特徴について詳細に分析された。本巻には、  
朱点・白点・緑点の仮名とヨコト点、及び  
墨書の仮名が付されているが、築島裕氏は  
長保年間頃(999～1004)に付された  
と解説しており、また墨書の仮名は、院政期  
に付されたと見られる、と述べられた。日本  
で書写された『摩訶止観』では現存最古の写  
本と見られ、訓点資料としても重要な一巻  
であると締められた。

ヴィータ氏は、経録とは、書誌的な好奇心  
から編纂されたのではなく、また經典のジャ  
ンルについて単に観念的に思索した結果とし  
て生み出されたものでもなく、それは寺院が  
備えるべき正統聖典を正しく作り出すこと  
を目的とした、と述べられた。そして、一切  
経がまだ写本という形で伝えられていた中国  
中世から、広く流布した形は一切経に到る  
道が始まる、と説かれた。

陳氏は、中国僧の海雲(?-834+)に  
帰せられる『阿部大法相承師資付法記』の流  
伝の特異性について講演された。本書は中国  
ではほとんど流布しなかったが、日本では白  
熱した議論的となり、台密の葉雋(?-1110+)と  
の激しい論争で本書が用いられた。葉雋の  
おかげで、本書が中国撰述であると再確定  
でき、更に、日本密教の形成と変容に大き  
く影響した密教思想が唐代中国のどこに由  
来するかを再確定できる、と論じられた。

高田氏は、『大唐西域記』の最初のテキスト  
が高宗の顕慶元年(656)に多少の変改を  
受けた点について分析された。全体としては



恋田知子研究員

恋田氏は、最近金剛寺で発見された『十種  
供養式』を精査し、そこに記載のある安居院  
流唱導の祖澄憲とともに、当時の法華経の  
唱導・儀礼に言及された。齊藤氏は、金剛  
寺本『続高僧伝』は古態を留めている可能性  
が高いなど、その重要性を述べられた。中村  
氏は、文化財の保管に関して、愛情を持って  
接する心構えが大切であるなどと述べられ、  
資料調査に携わる者は身の引き締まる思い  
であった。

今年度第3回公開研究会の報告について  
は、本学学術フロンティアのホームページを  
ご覧下さい。

## 出版物紹介

○日本古写経善本叢刊第四輯(近刊)

『集諸経礼懺儀 巻下』

儀礼テキスト伝播の多様性を辿る

第四輯では『集諸経礼懺儀』巻下と、それ  
に関連する『往生礼讃偈』の諸伝本を紹介す  
る。『集諸経礼懺儀』は『開元釈教録』の編者  
である唐・智昇(730-)が長安で流行  
していた礼懺儀を上下二巻に集録したもの  
であり、今回取り上げる巻下には、初唐の  
善導(613-681)『往生礼讃偈』(『往生



ディスカッションの様子。講演者は、左より、三宅、池、赤尾、ヴィータ、陳、高田の各氏。

大きな変化は生じなかったと思われるが、一  
部組織的に行われたと見られる変改が存在  
するとされ、唐代の正しいテキストを保存す  
る日本古抄本や敦煌本と、現行の蔵経本の  
テキストとを比較し、本書が沙門辯機によつ  
て草稿された点も絡めて、組織的な変改の  
事実を明らかにしていかけた。

講演の後、ディスカッションが行われ、文献学  
的な分野を中心に活発な議論がなされた。冬  
の短い日が落ちすっきり暗くなった頃、学術  
フロンティアの国際シンポジウムも帷を下ろした。

礼讃「六時礼讃」が全文収められている。  
『往生礼讃偈』は奈良時代に將來され、平安  
時代には源信(942-1017)『往生要集』  
等に引用が確認されるが、日本に現存する  
最古の部類は京都誓願寺蔵本、三重専修寺  
蔵本、京都大学附属図書館蔵本等、いずれも  
鎌倉初期の遺品である。これらに対し、年代  
的により善導に近接するものが敦煌本であ  
るが、それらはいずれも断簡、もしくは別行  
(抄出)本であり、『往生礼讃偈』古態の全貌を  
伺うことは叶わない。このような現存状況の  
中、『集諸経礼懺儀』巻下へ着目することの意  
義は、単に伝本の数を増やすのみに止まら  
ない。日本に現存する古写経本『集諸経礼懺  
儀』巻下の系譜は、開宝蔵(北宋勅版)本と  
版本大蔵経成立以前の写本大蔵経本の二系  
統に大別されるが、後者は版本大蔵経本に  
比し、より古態を留めている蓋然性が高く、  
唐代の『往生礼讃偈』の復元と、その変遷の  
検討を可能にするものである。

今回の出版では、入蔵本である檀王法林  
寺蔵本(中尊寺経(清衡経)、平安末期写)、  
七寺蔵本(安元三年写)、金剛寺蔵本(鎌倉  
中期写)、増上寺蔵宋思溪版本の四点、並び  
に京都大学附属図書館蔵『往生礼讃偈』(谷  
村文庫、建長三年版本)、七寺蔵『阿弥陀往  
生礼仏文』(『往生礼讃偈』異本、平安末期写)  
の『往生礼讃偈』古版本、異本二点を併せて  
影印で紹介し、解題・翻刻を付す。また訓点  
の付される京都大学附属図書館蔵本は訓読  
文を掲載する。これら資料篇に研究論文を  
併せ刊行することで、大蔵経研究、並びに  
仏教儀礼研究に資したい。

(上杉智英)

## 既刊書

### ○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏観無量壽経 無量壽経 優婆提舍願生偈註卷下』

### ○『日本現存八種一切経対照目録』(非売品)

本書は、ホームページ上でダウンロードできます。

### ○『佛教文献と文學 日臺共同ワーク ショップの記録 2007』(非売品)

『いとくら』既刊号

## 『いとくら』既刊号

### ○創刊号

『摩梨支天経』—金剛寺本と敦煌本— / 方廣鋈

金剛寺経卷の紐 / 道明新一郎

古写経の死番虫 / 吉川也志保

寺院紹介・調査日記「金剛寺」「七寺」

その他

### ○第2号

七寺の経蔵 / 中村一紀

スクロールビューアについて / 村川猛彦

金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典 / デレアヌフロリン

天野山金剛寺の浄土教典籍 / 落合俊典

古写経と微生物 / 吉川也志保

寺院紹介・調査日記「西方寺」

その他

### ○第3号

七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について / 赤尾栄慶

古写経の色 / 吉川也志保

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下について / 上杉智英

現存最古の大唐西域記写本 / 高田時雄

寺院紹介「檀王法林寺」

その他

### ○第4号

天野山金剛寺所蔵古写本の科学分析 / 坂本昭二 江南和幸

古写経と唐櫃 / 吉川也志保

日本古写経本『賢愚経』とその伝来 / 三宅徹誠

書陵部に残る新羅浄土教の遺文 / 南宏信

寺院紹介「徳運寺」

その他

『いとくら』のバックナンバーを希望される方は、学術フロンティア実行委員会までご連絡ください(連絡先は下欄参照)。



## 学術フロンティア・スタッフ紹介

### 研究代表者

今西順吉(国際仏教学大学院大学教授・学長、国際仏教学院理事)

研究分担者

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)

Hubert Dierck(同・教授)

津田眞一(同・教授)

デレアヌフロリン(同・教授)

松村淳子(同・教授)

木村清孝(同・特任教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部長(上席研究員))

高田時雄(京都市立大学人文科学研究所教授)

梶浦 晋(同・附属東アジア人文情報学研究センター助手)

ター助手

## Christian WITTEBN

(同・附属東アジア人文情報学研究センター准教授)

宇都宮啓吾(大阪大谷大学教授)

大倉孝昭(同・教授)

中川 優(和歌山大学教授)

村川猛彦(同・専任講師)

研究協力者

末木康弘(国際仏教学大学院大学附属図書館副館長)

堀伸一郎(国際仏教学大学院大学附属国際仏教学研究所所長)

研究副所長

齊藤達也(国際仏教学大学院大学附属図書館職員)

佐藤愛弓(同志社女子大学非常勤講師)

能島 覚(佛教学総合研究所嘱託研究員)

三宅徹誠(国際仏教学大学院大学附属国際仏教学研究所非常勤研究員)

吉川也志保(日本学術振興会特別研究員)

相原良直(華頂短期大学教授)

岡崎友子(就美大学准教授)

廣坂直子(京都外国語大学非常勤講師)

江南和幸(龍谷大学名誉教授)

坂本昭二(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター研究員)

池 麗梅(ブリタニッシェンロニア大学大学院博士課程、元学術フロンティア研究員)

佐藤もな(帝京高等看護学院非常勤講師、元学術フロンティア研究員)

大塚紀弘(日本学術振興会特別研究員、元学術フロンティア研究員)

箕浦尚美(大谷大学助教、元学術フロンティア研究員)

赤塚祐道(国際仏教学大学院大学研究生、元学術フロンティア研究補助員)

林 敏(海南師範大学南海区域文化研究中心研究員)

研究員(PD)

林寺正俊・恋田知子・南 宏信・上杉智英・橋本貴朗

研究補助員(RA)

定源(王招国)・山野智恵子

(平成21年12月現在)

文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業  
学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら 第5号

平成21年12月10日発行

編集・発行

国際仏教学大学院大学

学術フロンティア実行委員会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-3-23

URL <http://www.icabs.ac.jp/frontia>

E-mail [frontier\\_20@icabs.ac.jp](mailto:frontier_20@icabs.ac.jp)

印刷 株式会社 高山